

朝鮮半島における偽経『天地八陽神呪経』の流通と特徴

著者	佐藤 厚
著者別名	SATO Atsushi
雑誌名	東アジア仏教学術論集
巻	8
ページ	121-166
発行年	2020-02
URL	http://doi.org/10.34428/00012585

朝鮮半島における偽経 『天地八陽神呪経』の流通と特徴

佐藤 厚*

1 問題の所在

1-1 はじめに

「東アジアにおける偽経」という学会テーマのもと、筆者は朝鮮半島における偽経をとりあげる。朝鮮半島における偽経という場合、①朝鮮半島で成立した偽経¹という意味と、②中国成立の偽経が朝鮮半島で流通した、という二通りの解釈ができるが、本論文では後者を扱う。中国成立の偽経が朝鮮半島で盛行した文献といえば『父母恩重経』がよく知られるが、本論文では偽経『天地八陽神呪経』（以下本経）を研究対象とする。

本経は現在、大正蔵経85巻古逸部・疑似部に収録され分量は3頁ほどと長くない。内容は、人が家を新築したり、葬儀や結婚の日取りを決める時などに、民間に伝わる神や道教の神を恐れたり、あるいは占術などに頼らず、本経を読誦すれば幸福を得られるというものである。このように本経は、高邁な仏教思想を説くのではなく、現実の生活の中で、葬儀や結婚の日取りに悩んだり、方角や土地の良し悪しを気にしながら幸福を願う人々の要求に応じたものである。これは8世紀頃に中国で成立したとされ、朝鮮半島、日本、ベトナムでも受容され、さらにチベット語、トルコ語、モンゴル語、西夏語にも翻訳されるなど、東アジアから中央アジアまでの広範な地域に伝播した。

この中でも朝鮮半島では重視された。朝鮮時代には数多くの刊本、写本

*専修大学ネットワーク情報学部特任教授。

が製作され、19世紀には本經唯一の注釈も作られた。また本經は僧侶だけでなく巫覡や盲僧などによっても唱えられた。それを象徴するように、韓国語に「盲僧が八陽經を唱えるように」という諺がある²。これは「意味もわからずぶつぶつ声に出している」という意味である。この諺の成立時期はわからないが本經の流行を物語る証拠である。さらに本經の流行は現在の韓国でも続いている。2000年以後に限っても、読誦や写經用あるいは解説の本が6冊刊行され、僧侶の読經のカセットテープやCDも8種類発売されている。また仏教系新聞によれば、本經は在家信者が読誦あるいは勉強する經典の第7位であるという³。ここから本經は、朝鮮時代から現在に至るまで韓国仏教の信仰形態一つの軸をなしており、よってその解明は韓国仏教自体の解明につながる重要な作業であるといえる。

以下、本經の研究史を概観したのち本論文の問題の所在に進む。

1-2 偽經『八陽經』研究史概観

本經が最初に学会で注目されたのは1915年の羽田亨の研究による。羽田はあるウイグル語の仏典を研究する中で、それが本經の翻訳であることを解明した。その後、1960年代から小田寿典がトルコ語本八陽經の研究を開始した⁴。1981年には西岡祖秀がチベット訳の敦煌写本について報告した。1997年には木村清孝が漢文テキストに焦点を当て、敦煌本と続藏本との対照を通して本經の成立と変容について論じた。2010年には小田寿典が『仏說天地八陽神呪經一卷 トルコ語訳の研究』を刊行した。

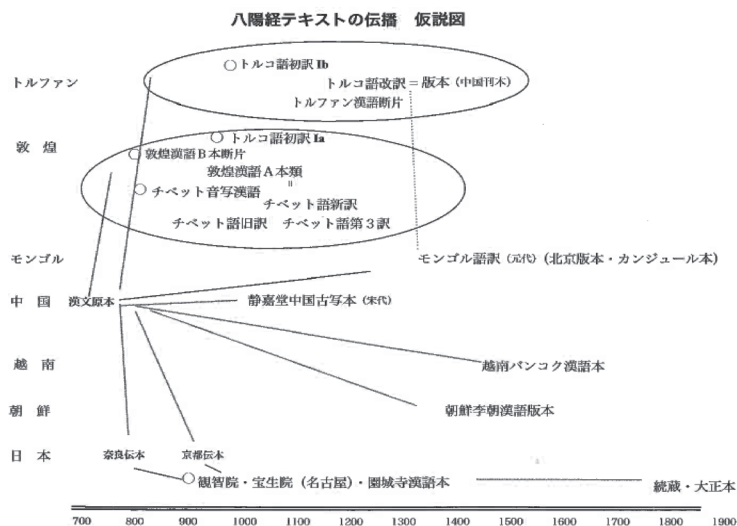
中国における流通については、2008年に玄幸子が敦煌写本をもとにして宋代社会における受容を論じた。敦煌文献を中心とした文献研究については張涌泉、羅慕君〔2014〕など中国で研究が進んでおり、2015年には羅慕君が「敦煌『八陽經』漢文写本考」を発表した。

朝鮮半島については、1931年に高橋亨が「朝鮮墳墓の齋宮と天地八陽經」という論文を発表した。その後、60年近く経った1997年に増尾伸一郎が「朝鮮本『天地八陽神呪經』とその流伝」を発表した。また、朝鮮半島では19

世紀に僧侶の敬華（1786-1848）が本經の唯一の注釈を作っているが、それについて1977年に権奇悰が「敬華の天地八陽神呪經註釈考」を発表している。

日本における流通については、1994年に増尾伸一郎が「日本古代における『天地八陽神呪經』の受容」という題目で発表している。1995年には柏谷直樹が高山寺法鼓臺旧蔵の『仏説天地八陽神呪經』について報告している。

簡単に研究史を見てきたが、最後に小田 [2015: 68] に掲げる「八陽經テキストの伝播 仮説図」を掲載し、本經の広がりを示す。



1-3 問題の所在

ここではまず先行研究である高橋亨と増尾伸一郎の研究を紹介した後、筆者の問題の所在を明らかにする。

高橋亨 [1931] は、1 朝鮮墳墓の斎宮、2 天地八陽經との二つに分かれる。后者では、まず朝鮮時代の寺院での『八陽經』に基づく儀式を紹介す

る。毎年旧暦の二月と十月の中三日間、伽藍神のために大祭斎を設け、神衆壇の神将などの供養を行なう伝統があり、その中で『八陽經』を読誦していたが、1910年に韓国が日本に併合されると朝鮮総督府が禁止したという。続いて『八陽經』の成立を論じ、最後に朝鮮で流行した理由として、寺院勢力が、朝鮮の社会に大きな影響力を持つ風水地理説の唱える凶災を、仏教の修法と法力によって除き、吉祥を招くことができると強調してきたことである、と述べる。

増尾〔1997〕は、1 朝鮮本『天地八陽神呪經』の諸本、2 朝鮮本『天地八陽神呪經』の刊記、3 『天地八陽神呪經』の受容相から構成される。1 は朝鮮時代の刊本に関するテキスト論である。2 では各刊本に記された刊記を分析して、朝鮮本には父母の供養や一族の繁栄、あるいは王朝の隆盛などを祈願する例が多いとし、それと敦煌写本と比較して受容のあり方の違いを考察した。3 は伝来時期について、この經典を含む疑偽經集『六經合部』が15世紀から繰返し刊行されていることから、高麗時代にはかなり流布していたと推測する。続いて朝鮮の寺院での流行について述べるが、これは前の高橋の論に従ったものである。

増尾〔1998〕は、17世紀にさかんに刊行された『仏説広本太歳經』をとりあげ、道教と仏教と巫俗との交流を探る。この經典は、読誦により一切の祈願が成就し、あらゆる災厄を回避し長寿がかなえられることを説く。同時に、この經典の名を表題として偽疑經典類が合綴されているが、この中に本經も含まれる。さらにこの經典の刊本と収録經典を整理している。

これらの成果に基づきつつ、本論では本經の刊本に焦点を当てて研究を行う。論述の次第は次の通りである。第一に、本經の成立と内容について概観する。第二に、増尾の研究を発展させる形で朝鮮時代の刊本を整理し、刊行年代、形態（文字、行次数）の変化などから本經の流通の変化を解明する。第三に、朝鮮刊本だけに存在する序文と、さらにその中のある刊本だけに見られる靈驗譚「天地八陽經密伝」を解説し、その意味を探る。

本研究により、本經の流通史という面においては朝鮮半島という地域的

特徴を指摘することができる。また韓国仏教の研究という面においては、朝鮮時代後期、主として17世紀以降の仏教の状況を解明する手がかりになる。この両面で本研究は意義を持つと思われる。

2 偽経『八陽経』の成立と概要

2-1 偽経『八陽経』の成立

現在大正蔵経85巻に収録される本経『天地八陽神呪経』(No.2897)の成立の研究には木村清孝〔1997〕がある。木村はまず日本での写経の状況などから、本経の成立を720年から760年の間と推定する⁵。そして現在みる本経の成立について次の二つの段階があるという。

第一に、本経は、題名や内容面が類似していることから竺法護訳『八陽神呪経』(大正蔵14、No.428)を下敷きとして作られた。

第二に同じ『天地八陽神呪経』でも発展段階がある。本経のテキストには敦煌写本が多数存在するが、中でもペリオ本2098が原形とされる。それに対して発展形が大正蔵本のもとになった続蔵本である。両者を比較すると、後者は前者よりも内容が増広され思想的にも異なっている。その違いは、発展形のほうが正統的な大乘仏教経典としての色合いを濃くし、体裁を整えていることである⁶。中でも『維摩経』との関係を指摘する。そして「仏教思想としては如来蔵系・中観系・唯識系・密教系を、中国思想としては儒教系・道教系・民俗信仰系を巧みにバランスよく取り入れ、「神呪」としてまとめあげた本経を高く評価し受容しながらも、中国でもっとも人気のある経典の一つである『維摩経』の構想と思想が援用されていないことに不満を持った一群の仏教者たちの手」で作られたと述べている⁷。

2-2 偽経『八陽経』の概要

続いて本経の概要を示す。これは後に序文を検討する際の資料にするため、分科して記し、全体に通し番号を付けた。この分科は筆者が判断した

大まかな区分である。逐語訳ではないが、参考のために大正蔵85巻の頁数と段をカッコ内に示した。

(1) 説法の舞台

1 (1422b) このように聞いた。ある時、仏は毘耶達摩城の寥廓宅におり、四衆が取り囲んでいた。

2 会座にいた無礙菩薩が質問する。衆生には、識者が少なく、無識者が多い、念仏者が少なく不念仏者が多いなど、優れた者は少なく愚かな者は多い。そして様々な苦しみがあるが、それは邪倒の見を信じているからである。仏よ、衆生のために正見の法を説きたまえ。

(2) 人間が最も優れている

3 (1422c) 仏は言った。無礙菩薩よ。あなたのために天地八陽神呪經を説く。これは過去、現在、未来の仏が説くものである。天地の間に人間が最も優れている。人とは真であり正である。心に虚妄は無く、身には正真を行ずる。〔人という文字を分解すると〕左の「ノ」を真とし、右の「人」を正とする。

(3) 『八陽經』の様々な功德

4 無礙菩薩よ。衆生は人身を得ても悪業を作り死後には種々の罪を受ける。しかし、もしこの經典を聞き、信受して逆らわなければ苦海から解脱し、善神の加護を受け、寿命が延びて夭折することはない。それは信の力である。その他、書写、受持、読誦すれば非常な効果があり寿命が終わった後に成仏する。

5 仏は無礙菩薩に告げる。もし衆生が邪倒の見を信じていると、邪魔外道、魑魅魍魎などに苦しめられる。それに対して善知識にあつてこの經を三回読むと悪鬼などは消滅する。もし衆生が淫欲などが多い場合、この經を三回読むと消滅する。

6 もし善男子、善女人が、有為の法を興そうとしてまずこの経を三回読むと、家などの建物を建てようとしても（1423a）、日遊月殺、大將軍、太歳、黄幡豹尾、五土地神、青龍白虎朱雀玄武、六甲禁諱、十二諸神、土府伏龍などの〔民間信仰や道教での神々〕や一切の鬼はみな隠れてしまい大吉利を得る。その後、家は安泰、富貴は求めずして来る。

7 もし従軍しても、官に仕えて興生し、よいことが得られる。家門が興り人は貴く、子孫が栄える。

8 もし衆生が官吏や盗賊に捕まっても、この経を三回読むと解決する。その他、受持、読誦したり他人のために書写すると、水や火に入っても溺れず燃えることはない。

9 もし人に妄語、綺語、悪口、両舌などの問題があっても受持、読誦すれば解決する。

10 父母に罪があり地獄に落ちることが決まっても、その子供がこの経を七回読むと父母は地獄を離れて天上に生まれ、見仏聞法して成仏する。

11 仏は無礙菩薩に告げる。毘婆尸仏の時、優婆塞、優婆夷がおり仏法を敬崇し、『八陽経』を書写し受持読誦して菩提道を成じ、普光如来応正等覺と名け、劫を大漏といい、国を無辺といった。

12 また無礙菩薩よ。『八陽経』は閻浮提に行なわれ、どこにも八菩薩と諸梵天王がおり（1423b）、この経を取り囲んでいる。

13 仏は無礙菩薩に告げる。善男子、善女人が衆生のためにこの経を講説して深く実相に達すれば、その身心は、仏が身、法が心であることがわかる。眼は無尽の色を見るが、色は空、空は色である。すなわち眼は妙色身如来である。同様に、耳は妙音声如来、鼻は香積如来、舌は法喜如来、身は智明如来、意は法明如来である。

14 善男子よ、この六根が顕現するのを見るに、人はみな空しくこれを説く。もし善語を説けば善法が常に転じ聖道を成ずる。邪語なら逆であり地獄に落ちる。人の身心は仏法の器、十二部の大経巻であり、大昔から読んでも尽きない如来蔵の経である。ただ〔それは〕心を識り性を見る者だけ

が知るものであり、声聞や凡夫が知るものではない。

15その時、五百の天子が法眼淨を得て阿耨多羅三藐三菩提心を發した。

（４）殯葬と出産などについて

16無礙菩薩が仏に問う。人の生死には時間を選ばない。どうして殯葬の時には日を選ぶのか。(1423c)そして、それにもかかわらず貧乏の人が多いのなぜか。

17仏が答える。天地は廣大にして清く、日月は広明にして明るく、時年は善美であり異なりがない。善男子よ。人王菩薩は衆生のために人の主となり、俗人のために暦を作って配布した。愚かな人は文字を信用するのでその災いを受ける。また邪師により邪神を求めたり餓鬼を崇拜したりする。その人は死後に苦しみを味わう。

18善男子よ。子供を生む時、この經典を三回唱えれば簡単に生まれる。善男子よ。日日は大好日、月月は大好月、年年は大好年である。死ぬ時、この經を三回唱えれば、問題はなく福德を得る。殯葬の日にこの經を七回唱えれば、問題はなく福德を得る。また殯葬の場所について東西南北などの方角は関係ない。この經を三回唱えれば、問題はなく福德を得る。

19仏が前の内容を偈で説く。(1424a)

20その時、七万七千人が阿耨多羅三藐三菩提心を發した。

（５）結婚について

21無礙菩薩が仏に問う。凡夫は結婚する時、占い師にみてもらい結婚の日取りなどを決めるのに、結婚してから富貴のまま老いる人は少なく、貧乏で死別する人が多いのはなぜか。

22仏が答える。天地、月日、水火、女男がそれぞれ陰陽を構成し、そうした天地の気が合わさって一切の万物が生じる。これが天の常道、自然の理、世諦の法である。愚かな人は無知のため、邪師を信じて占いをするが、善を行わず悪業を造る。〔それゆえ〕命終の後に人身を得る者はわずかで、

地獄、餓鬼に行く人はとても多い。また、人身を得たとしても正信修善の者はわずかで、悪業を造る者はとても多い。婚姻関係を結ぼうとする時、〔五行説の〕水火の相剋などを問うことをするな。ただ禄命書だけを見て福德の多少を知れ。そして呼び迎える日にこの經典を三回唱えることを礼とせよ。これにより幸福が訪れる。

(6) 八菩薩の誓い

23この時、八菩薩がおり、仏の威神を承けて大総持を得、常に人間に処して和光同塵し破邪立正する。それは跋陀羅菩薩漏尽和など(1424b)の八菩薩である。そして八菩薩は仏に、自分たちが仏のもとで得た陀羅尼神呪を説いて、『八陽經』を読誦する人を擁護することを誓う。そして「阿佉尼、尼佉尼、阿毘羅、曼隸、曼多隸、娑婆訶」という陀羅尼を説く。そして読經法師を悩ませる人がいたら、自分たちはこの神呪を説いて、その人の頭を破るという。

(7) 八陽經と名ける理由など

24無辺身菩薩が仏に八陽經と名ける理由を問う。

25仏は、「八」とは分別、「陽」とは明解の意味である。それは大乘空無の理を「明解」して八識因縁空無所得を「分別」することである。続いて八識を説きながらそれを天、如來と結合させる。すなわち兩眼—光明天—日月光明世尊、兩耳—声聞天—無量声如來、兩鼻—仏香天—香積如來(1424c)、口—法味天—法喜如來、身—盧舍那天—盧舍那仏、盧舍那鏡像仏、盧舍那光明仏、意—無分別天—不動如來、大光明仏、心—法界天—空王如來である。そして第七識である含藏識からは『阿含經』と『大般涅槃經』が出、第八識である阿賴耶識からは『智度論』と『瑜伽論』が出る。そして、仏は法、法は仏であり、合わせて一相とし、大通智勝如來を現ずる。

26仏がこの經を説くと、大地は六種に振動するなどし、一切の罪人は苦を離れ、みな無上菩提心を發した。

27その時に、八万八千の菩薩は一時に成仏し、空王如来応正等覺と名け、劫を離苦とし、国を無辺と名けた。一切の人民は（1425a）菩薩の六波羅蜜を行じて無所得の法を得、六万六千の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷は大総持を得て不二法門に入った。また無数の天、竜、夜叉らは法眼淨を得て菩薩道を行じた。

28善男子よ、官吏となって登庁する日、あるいは新宅に入居する日にこの經を三回読めば、大吉利で善神は加護し、寿命は延びる。

29善男子よ、もしこの經を一度読めば一切經を一度読むことになり、もし一卷を書写したら一切經を書写したことになる。その功德ははかりしれない。

（8）『八陽經』を誹謗するとどうなるか

30無辺身菩薩よ、この經典を誹謗し、仏説でないと言う人がいたら、その人は現世でハンセン病（白癩病）にかかり、悪瘡と膿血が体中に行きわたり、なまぐさい臭いがして他人に嫌われる。死後には阿鼻無間地獄に落ちてすさまじい苦しみを受ける。

31仏が罪人のために偈を説く。身や五体は自然の存在である。それらは自然に成長し、老い、死んでいく。長短を求めようとしてもできない。苦樂はあなた自身が引き受けるものであり、邪正はあなたによる。有為の功を求めようとするなら經典を読め、師匠には問うことなかれ。

32仏がこの經典を説き終わると、一切の衆生は未曾有を得た。

33（1425a）菩薩聖衆、天神地祇はみな歡喜奉行了した。

2-4 思想

本經の思想については木村〔1997〕、小田〔2010〕の研究があり、ここではそれらを参考にしながら筆者なりにそれを二つに整理する。

第一に、本經の読誦などにより生ずる力の強調である。その場面は、（1）人間を苦しめる状況（概要8・官吏や盜賊による捕縛、火や水による被害、

概要10・死後の父母の墮地獄）からの脱却、（2）淫欲や口業など人間自身が抱える問題の改善（概要4・造業造悪、概要5・淫欲、概要9・口業）、（3）人間に害を与えるかもしれない存在の対治（概要5・邪魔外道、魑魅魍魎など、概要6・日遊月殺など）、（4）結婚（概要21-22）、出産、葬儀（概要16から18）、初登庁、新居への入居（概要28）という人生の節目における幸福、に分けられる。

この中の（1）については『観音経』と同じ趣旨のものが多く、本経が大乗經典の中の衆生救済の流れを受けたものであることがわかる。

この經典が独自性を持つのは（3）、（4）である。（3）では庶民が怖れていた悪鬼や、民間信仰や道教での神々を対象とし、それよりも本経の力が強いことを説く。

（4）は占術や風水地理説などの土俗的呪術への批判を行う。その前提となるのが自然の摂理との対比である。これを殯葬に関する記述で確認する。まず無礙菩薩が、人が殯葬の時に日を選ぶのに、なぜ福をもたらさず貧乏の人が多いのかと質問する。それに対して仏はまず、天地は広大、日月は広明、時年は善美であるという、いわば自然の摂理を説く。そして「時」すなわち人間が使う暦とは、菩薩が人間たちの生活のために作ったものである。しかし人間は文字に執着し、さらにそれに基づく占い師を求め餓鬼を信じ、それゆえ死後に苦しみを味わうのだと述べる。このように自然の摂理と人間の占術を対比しながら占術を否定するのである。そして本経を唱えれば、その問題は解決するという。このことについて木村清孝〔1997: 480〕は「儒仏道三教の本来的な一体性を確信しつつ、現実の世界のあり方をそのまま肯定している」とし、「本経の作者たちは、莊子のごとく「死生は命なり」と達観し、中国仏教を特色づける現実肯定と三教調和論の大きな流れの中に身を遊ばせながら、これに仏教の業思想を結び付け、後に禪思想において率直かつ明確に打ち出されることになる「日々好日、月々好月、年々好年」の人生を希求しているように思われる」と述べている。

第二に、人間至上観と特異な仏教思想である。人間至上観とは最初の仏

の説示で「天地の間に人間が最も優れている」（概要3）と説き、存在物の中での人間の優越を説いている。これについて木村はその人間至上主義の思想が『原人』を著わした韓愈や、『原人論』を著わした宗密よりも前に現れたことは重要であると指摘している⁸。

続いてこれが関連すると思われるのが、人体と仏とを結合させる仏教思想である。概要13では、人の身心は、仏が身、心が法であるとして、仏との本来の一体性を説く。その例として、眼は妙色身如来であるなど、五根と如来との一致を説く。概要14では人の身心は仏法の器であり、十二部の大経巻であると述べる。また後半の概要25では八識説を説きながら、六識までは前とは違う形で、人体と天や如来と結合する。そして第七識からは『阿含経』と『涅槃経』が出、第八識からは『智度論』と『瑜伽論』が出るという。こうした本経の仏教思想については本経の流通や研究の中では殆ど問題とされないが、筆者は今後注目すべきであると考えている⁹。

本経の仏教思想の背景について小田寿典〔2010〕は、本経の語句の中、参考にしたであろう経典を精査している¹⁰。そこから経典名だけを抜粋すると、『妙法蓮華経』、『観音経』、『正法華経』、『般若心経』、『灌頂経』、『仏説仏名経』、『陀羅尼雑集』、『仏説呪土経』、『仏説安宅神呪経』、『現在賢劫千仏名経』、『維摩詰所説経』、『大般涅槃経』、『仏説称揚諸仏功德経』、『五千五百仏名神呪除障滅罪経』、『仏説観仏三昧海経』である。

3 朝鮮における流通

3-1 諸テキストの中の朝鮮本の位置付け

まず小田〔2010：46-47〕の研究から、諸テキストの中での朝鮮本の位置付けを紹介する。ここで小田がいう朝鮮本とは、後述する刊本の中の1807年刊の熊津寺本である。

小田は12種類のテキスト（1 日本古写本、2 敦煌B本、3 チベット音写本、4 トルコ語訳本、5 チベット旧本、6 チベット新本、7 敦煌A類本、

8 中国（静古）本、9 モンゴル語訳本、10 朝鮮本、11 越南本、12 続蔵本）を対照し、語句の異同からそれをグループに分ける。第一のグループは2、3、4である。第二のグループは5、6、7である。第三のグループが8から12であり、朝鮮本もここに入る。これは大きな区分けであり、細かく見ると第三のグループでも文字の異同がある。

これについて小田は朝鮮本がトルファン出土漢語文献に一致することを指摘する。すなわち「トルファン地方がウイグル時代に遼朝と頻繁に交流があったことをみれば、朝鮮本の源流が遼朝仏教にあることを推測させる」小田〔2015:54〕と述べ、朝鮮本の原形が遼代仏教のテキストである可能性を示唆している。すると本経の朝鮮半島伝来は11世紀ないし12世紀と考えられようか。当時、朝鮮半島は高麗時代である。これは現在、他の資料からは証明できないが、興味深い仮説である。

3-2 偽疑經典群における『八陽經』の位置づけの変化

近代以前、本経は単独で流通した例は少なく、ほとんどが『仏説広本太歳經』、『仏説地心陀羅尼經』などの偽疑經典類と合綴して刊行されている。『仏説広本太歳經』は読誦により一切の祈願が成就し、あらゆる災厄を回避し長寿がかなえられることを説く經典。『仏説地心陀羅尼經』は日本でも盲僧によって唱えられる經典である¹¹。

筆者は目録や国立中央図書館、文化財庁のサイトなどから得られた書誌情報をもとに、朝鮮時代の刊本（有刊記）18本を刊行年代順に整理し、〈表1〉、〈表2〉を作成した。典拠は後掲〈表2〉の一番右に記した。

次に示す〈表1〉の項目は、刊行年、刊行寺院、刊行地、外題、収録經典数、収録經典である。情報を得られなかった項目は？とした。

〈表1〉朝鮮半島における偽經『八陽經』刊本一覧（現存本・有刊記）（1）

No	刊年	刊行寺院	刊行地	外題	経数	収録經典
1	1549	神興寺	慶南：晋州	天地八陽神呪經	15	八陽、太歳、地心、竈王、欽竈、安宅、百殺、金神、龍王、敗目、度厄、五姓、 埃堀 、明堂、救護
2	1609	松広寺	全南：順天	仏説天地八陽神呪經	15	八陽、太歳、地心、竈王、欽竈、安宅、百殺、龍王、敗目、度厄、五姓、 埃堀 、明堂、救護、牛馬
3	1635	龍藏寺	全北：泰仁	仏説広本太歳經	16	太歳、地心、 <u>八陽</u> 、竈王、欽竈、安宅、百殺、金神、龍王、敗目、度厄、五姓、 埃堀 、明堂、救護、牛馬
4	1657	天冠山	全南：長興	仏説広本太歳經	16	太歳、地心、 <u>八陽</u> 、竈王、欽竈、安宅、百殺、金神、龍王、敗目、度厄、五姓、 埃堀 、明堂、救護、牛馬
5	1666	桐華寺	慶北：安宴	仏説広本太歳經	15	太歳、地心、 <u>八陽</u> 、竈王、欽竈、安宅、百殺、金神、龍王、敗目、度厄、五姓、 埃堀 、明堂、救護
6	1670	新興寺	江原：東草	仏説広本太歳經	15	太歳、地心、 <u>八陽</u> 、竈王、欽竈、安宅、百殺、金神、龍王、敗目、度厄、五姓、 埃堀 、明堂、救護
7	1731	普賢寺	平北：寧辺	天地八陽神呪經序	2	<u>八陽</u> 、太歳
8	1733	仏智庵	?	仏説天地八陽神呪經	* 2	<u>八陽</u> 、七星請儀文ほか ¹²
9	1769	鳳停寺	慶北：安東	天地八陽神呪經	1	<u>八陽</u>
10	1791	松広寺	全南：順天	八陽經	3	<u>八陽</u> 、竈王、欽竈
11	1795	仏巖寺	京畿：楊州	八陽經	7	<u>八陽</u> 、明堂、竈王、欽竈、安宅、父母、參禪
12	1796	仏巖寺	京畿：楊州	八陽經	7	<u>八陽</u> 、欽竈、竈王、明堂、安宅、長寿、寿生
13	1797	仏巖寺	京畿：楊州	六經合部	7	<u>八陽</u> 、竈王、欽竈、安宅、明堂、寿生、十二
14	1807	熊津寺	慶南：昌原	天地八陽經	1	<u>八陽</u>
15	1856	奉恩寺	仁川：江華	八陽經 （*底本は仏巖寺本）	4	<u>八陽</u> 、竈王、欽竈、安宅、明堂
16	1861	碩川寺	慶北：清道	仏説天地八陽神呪經	?	?
17	1881	仏巖寺	京畿：楊州	八陽經	1	<u>八陽</u>
18	1908	*姜在喜	不明	天地八陽神呪經 （*底本は仏巖寺本）	3	<u>八陽</u> 、參禪、勸禪

八陽＝天地八陽神呪經、太歳＝仏説広本太歳經、地心＝仏説地心陀羅尼經、竜王＝仏説竜王經、
 歡竜＝仏説歡喜竜王經、安宅＝仏説安宅神呪經、百穀＝仏説百穀神呪經、金神＝仏説金神七殺
 經、龍王＝仏説龍王三昧經、敗目＝仏説敗目神呪經、度厄＝仏説度厄經、五姓＝仏説五姓反支
 經、埃堀＝仏説埃堀經、明堂＝仏説明堂神經、救護＝仏説救護身命經、牛馬＝仏説牛馬長生經、
 三災＝仏説三災消滅經、寿生＝仏説寿生經抄、十二＝仏説十二摩訶般若波羅蜜多經、父母＝父
 母恩重經、長寿＝長寿滅罪護諸童子陀羅尼經、參禪＝參禪曲、勸禪＝勸禪曲、

以下、〈表1〉をもとに本經刊行の時代的特徴を指摘する。

第一に最古の刊本についてである。現存する最古の刊本は1549年の神興寺本である。これについては従来の研究では触れられていない。ちなみに本經の刊本と流通との関係について増尾は、經典集成である『六經合部』に本經が収録され、その書名が15世紀に見えることから、『八陽經』もその直前の王朝である高麗時代に、かなり流通していた¹³と述べているが、これは誤解に基づく推論である。

増尾がいう『六經合部』とは〈表1〉13仏巖寺本（1797年）のことを指し、そこには確かに本經が含まれている。しかし一般に朝鮮時代の『六經合部』といえば、『金剛般若波羅蜜經』、『大方広仏華嚴經入不思議解脫境界普賢行願品』、『大仏頂首楞嚴神呪』、『仏説阿弥陀經』、『觀世音菩薩礼文』、『妙法蓮華經觀世音菩薩普門品』の六つの經典を集めて一冊にしたものである。これは1424年に成達生が書写したものに基づき安心寺で開刊されたものを始めとして、数多くの刊本が作られた¹⁴。すなわち題名は同じであるが中身が違っているのである。増尾は同じ表題をもつ『金剛經』などが収録される『六經合部』をも、本經が収録される經典集成と誤解し、それが15世紀初めに刊行されていたことから本經の刊行もその時期に遡ると考えたのである¹⁵。

第二に、「經数」を見ると、ほとんどが他の經典と合綴されて刊行されていることがわかる。その数は、1神興寺本から6新興寺本までは、15-16本の經典が合綴して流通していたが、7普賢寺本以降、合綴される經典の数が少なくなり、多くても11仏巖寺本の7本が最多である。これは經典群の位置付けが変わったのではないかとと思われる。6新興寺本までは、

順番の違いがあるが、『太歳経』、『地心陀羅尼経』、本経の三つの経典が比較的長い経典で、その他の竈王経などは短い経典である。これらが一つのセットになって祈祷用、あるいは読誦用経典群をなしていたが、18世紀の7 普賢寺本からは、そうした形態がとられなくなった。仏巖寺本はやや当初のものに近いと見られるが、それにしても15本の経典は一緒になっていない。この背景に何があるのかはわからないが、何らかの儀礼形態などの変化があったのではないか。最後に単刊の例は9 鳳停寺本、14 熊津寺本、17 仏巖寺本だけである。

第三に、刊行年度による本経の位置付けの変化を見る。まず外題に注目する。これは合綴された経典の中でどの経典が最初に来ているかの違いであり、三つの変化がある。①16世紀から17世紀初めの1 神興寺本と2 松広寺本では『天地八陽神呪経』、17世紀の②3 龍蔵寺本から6 新興寺本までは『仏説広本太歳経』、③18世紀以後の7 普賢寺本以降は『天地八陽神呪経』を外題とする。

この中、①から②への変化の理由はわからない。一方、②から③への変化は、18世紀以後、本経が他の偽疑経典群の中で重視されてきた状況を反映すると考えられる。これを版式の変化で説明する。②の経典の配列は、龍蔵寺本を例にすると『太歳経』—『地心陀羅尼経』—本経の順である。この中、『地心陀羅尼経』と本経との関係を版本で見ると、右側の5行目に「仏説地心陀羅尼経終」、6行目に「仏説天地八陽神呪経序」という文が来る（巻末図1）。それに対して7 普賢寺本（1731）を見ると、同じ版式であるが、5行目までの『地心陀羅尼経』があるべき部分は界線だけ引かれて文字は空白で、6行目に「仏説天地八陽神呪経」が彫られているという不自然な形となっている（巻末図2）。これはおそらく龍蔵寺本などと同じ版本を使いながらも『地心陀羅尼経』との連続を避け、本経を強調する意図が働いたためと考えられる。この証左になると考えられるのが普賢寺本の後跋である。そこには「大哉、八陽神呪経者、仏臨滅度、顧使神鬼、安寧人世、説流於世」とあり、本経が「神鬼を使い人世を安寧ならし

める」経典であると説いている。このような呪力を認めたことから、本経を強調したいとの意欲が生まれ、それが従来の版式を不自然な形であるが改変する動機となったのではないだろうか。

これに関連して、論文の冒頭で「盲僧が八陽経を唱えるように」という諺を紹介したが、『日省録』¹⁶の1762年4月25日の条には「古人の書物を読んでも自分のものにできなければ、いわゆる八陽経だ」¹⁷という文がある。ここでの八陽経の意味は諺と同じ「意味が分からず口にするだけ」ということである。この記録は普賢寺本刊行から30年後の事であるが、ここから本経の流行を読み取ることができよう。

普賢寺本の後に刊行された刊本の中、鳳停寺本（1769）は独自の板式であるが、松広寺本（1791）を見ると興味深いことがわかる。これは普賢寺本と同じく、それ以前の版式を継承しており、一枚目の左1行目から序文が始まるが、そのすぐ右の「天地八陽神呪経序」のハングル音写の部分が空白になっている。さらに以前の版本で右側に「天地八陽神呪経序」と記された部分は、それが同じく刻まれながらも、同時に本経の靈驗譚である「八陽経密伝」が記されている（巻末図3）。後述するが、これは本経読誦の効果を強調するものであり、それは本経が流行した時代相の中で作られた説話であると考えている。ここから18世紀末にも本経は流行していたと考えられる、さらにその4年後からは仏巖寺本（1795）が3年連続で刊行される。さらに1856年の奉恩寺本はその重刊であり、1908年姜在喜刊行本も仏巖寺本を底本にしている¹⁸。ここから18世紀後半から20世紀初めにかけて本経が盛んに刊行されたことがわかる。ただ仏巖寺本の版式は以前とは異なっている（巻末図4）。

3-3 現存朝鮮本『八陽経』の書式形態の変化

〈表2〉は〈表1〉で整理した偽疑経典の中、本経の形態的特徴を探るために、行字数、漢文の隣にハングルが併記されているか否か、経典の最初に序が付いているか否か、「八陽経密伝」が付いているか否かを整理し

たものである。

〈表2〉朝鮮半島における偽経『八陽経』刊本一覧（2）（現存本・有刊記）

No	刊年	刊行 寺院	刊行地	『八陽経』 行字数	ハン ゲル	序	密伝	所蔵	典拠
1	1549	神興寺	慶南：晋州	8行19字	×	○	×	東国	中央
2	1609	松広寺	全南：順天	8行19字	×	○	×	宝林寺	文化
3	1635	龍蔵寺	全北：泰仁	6行14字	○	○	×	中央	中央
4	1657	天冠山	全南：長興	6行14字	○	○	×	中央	中央
5	1666	桐華寺	慶北：樂安	?	?	?	?	誠庵	中央
6	1670	新興寺	江原：東草	6行14字	○	○	?	新興寺	ユ・クンジャ [2015]
7	1731	普賢寺	平北：寧辺	6行14字	○	○	×	中央ほか	中央
8	1733	仏智庵	?	6行15字	?	?	?	壇国	中央
9	1769	鳳停寺	慶北：安東	8行14字	×	○	×	中央ほか	中央
10	1791	松広寺	全南：順天	6行14字	○	○	○	中央ほか	中央
11	1795	仏巖寺	京畿：楊州	11行22字	○	×	×	奎章	中央
12	1796	仏巖寺	京畿：楊州	11行22字	○	×	×	フラ東	中央
13	1797	仏巖寺	京畿：楊州	11行22字	?	?	?	高麗	中央
14	1807	熊津寺	慶南：昌原	8行16字	?	?	?	東文	中央
15	1856	奉恩寺	仁川：江華	11行22字	○	×	×	淑大	中央
16	1861	碩川寺	慶北：清道	8行16字	?	?	?	啓明	中央
17	1881	仏巖寺	京畿：楊州	11行22字	?	?	?	誠庵	中央
18	1908	*姜在喜	?	11行22字	○	×	×	中央ほか	中央

*所蔵、典拠略号（参考文献に表示した以外）

中央＝韓国中央図書館検索、文化＝文化財庁文化遺産ポータル、
 誠庵＝誠庵古書博物館、高麗＝高麗大学校図書館、壇国＝壇国大学校栗谷記念図書館、安東＝
 安東大学校図書館、啓明＝啓明大学校トンサン図書館所蔵本、フラ国＝フランス国立図書館、
 全南＝全南大学校図書館、東文＝東洋文庫、東京＝東京大学総合図書館阿川文庫、奎章＝ソウ
 ル大学校奎章閣、フラ東＝フランス東洋言語文化学校、淑大＝淑明女子大学校図書館

ここでは刊本の形態に着目し、時代による本経の書式の変化を整理する。
 ここではAからD、そしてその他のグループに分けた。

〈表3〉文字、行字数による分類

	刊本名	文字、行字数	刊行時期
A	1 神興寺本、2 松広寺本	・ 漢字 ・ 行字数は8行19字	16世紀半ばから17世紀
B	3 龍蔵寺本、4 天冠山本、6 新興寺本、7 普賢寺本、10 松広寺本	・ 漢字、小さなハングル ・ 行字数は6行14字	17世紀前半から18世紀
C	9 鳳停寺本	・ 漢字のみ ・ 行字数は8行14字	18世紀後半
D	11 仏巖寺本、12 仏巖寺本、13 仏巖寺本、15 奉恩寺本、17 仏巖寺本、18 姜在喜本	・ 漢字、漢字と同じ大きさのハングル ・ 行字数は11行22字	18世紀末から20世紀初
未詳	5 桐華寺本、8 仏智庵本、14 熊津寺本、16 碩川寺本		

Aグループの特徴は、漢字だけのテキストで行字数は8行19字ということである（巻末図5）。Bグループの特徴は、半葉に6本の界線が引かれ漢字の左側にやや小さくハングルが併記されることである（巻末図1）。行字数は6行14字である。Cグループの特徴は、半葉に7本の界線が引かれ漢文だけで8行14字ということである（巻末図6）。Dグループの特徴は、半葉に10本の界線が引かれ、ハンゲルの文字が漢字と同じくらいになることである（巻末図4）。行字数は11行22字である。その他の諸本については画像を見ていないのでわからない。

これを時代の変遷で考えてみる。一つは16世紀の半ばから17世紀初めにかけてはAグループの漢文だけのものが最初に流通し、続いて17世紀半ばから18世紀後半にかけてBグループの小さなハングルが併記されるものが流通し、そして18世紀後半からDグループの漢字とハングルが同じ大きさのものが流通した。その他、Cグループのように漢文だけのものも作られた。

この中、A、B、Dへの変化に着目すると、それは読誦のためにハングルが強調されてきた過程であると思う。ハングルが記されるBとDを比較すると、Dではハングルが漢字と同じ大きさになり、漢字を見なくともハングルだけを読んで行くことがより容易になる。すなわちより読誦經典化

が進んだということがいえる。

最後に、グループ A、B、C には序があるが、D グループには付いていない。その理由はわからない。仏巖寺本の刊記には、本経を含めた六種の経典は、本来、経板が存在したがすり減ってしまったために重ねて刻んだとある²⁰。では、本来存在した経板に序文があったか、なかったかが疑問になるが、資料がないためにわからない。

4 朝鮮刊本独自の教説

ここでは朝鮮刊本だけに見られる独自の教説を二つ検討する。第一には、前述の A、B、D グループの刊本に収録される序文である。第二には、松広寺刊本（1791年）だけに付けられる靈驗譚である。

4-1 序文

これは最古の刊本である1549年神興寺本から1791年松広寺本までに見られ、1795年の仏巖寺本からは付けられない。内容は対句を用いながら本経の呪力を強調したものである。ここでは現代語訳を示し原文は注記した²¹。なお理解の便宜をはかるため、分科のための記号を付けた。〔〕は現代語訳に際しての補いである。

仏説天地八陽神呪経とは、(A1) 日月星宿は明らかであって四節（春夏秋冬）を示し、(A2) 八部神将は威厳を持ち〔木、火、土、金、水の〕五行と〔道教の護法神である〕六甲を示す。(B1)〔日月星宿の属性である〕明明は虚空にかがやき、〔それにより〕一切の鬼魅は界外に完全に消滅する。(B2)〔八部神将の属性である〕嚴嚴は五方（中央と東・西・南・北）に列敷し、〔それにより〕悪賊怨敵は家裡に息むことを求めるようになる。

(C1) それゆえ〔『八陽経』に問者として登場する〕無礙菩薩は、有

為の法を興そうとして長短の諸事を述べると、〔それに対して〕仏は解脱方便をもって答えた。(C2) 一方、〔もう一人の問者である〕無辺身菩薩は、疑悔の心を除こうとして〔仏に〕経卷の勝益を請うと、仏は讃毀罪福をもって説いた。

(D1) さらに、〔この經典を〕敬信する人は、諸惡、過難を解脱し、療腫を消滅する。(D2) 一方、〔この經典を〕受持する人は、永く邪鬼、横神を離れて富貴になる。

(E1) それゆえ〔この經典は〕役人から捕まえられたり、父母の三途の苦しみを遠ざける般若の利刀であり、(E2) 殯葬の日時と産生が簡単に速やかに行われる無礙の仙藥なのである。

(F1) この經典を読み、その後に結婚すれば、もし〔占いで〕姓氏が合わなくとも男女は百歳まで生き、仲睦まじいことは長く続く。

(F2) 〔この經典を〕礼拝すれば、その後、墓を造成するときに〔占いで〕方角などを問わず、この世の福は定まり吉祥であり、家は富み人は興る。

(G1) いまこの經典は、天地の諸聖が帰敬するものであり、(G2) 護家神王が仰ぎ信じるものである。(H1) それゆえに八大菩薩は経卷を頭に載せて読經の法師を衛護し、(H2) 見執の邪神は神呪を宣暢して穢身の悪心を摧き伏せる。

(I1) それゆえこの經典により、その教えの通りに行えば、悪い方角や人を害する土地などは存在せず、(I2) 三回読誦し、七回読誦した後には、凶日、禍時は永遠に存在しない。

(J1) その後に土地を動いたり垣を築いたりしても邪神は住まず、(J2) 古い家を捨てて新しい建物を建てても悪鬼は寄って来ない。

(K1) 禍害を退け、絶命に進んでも吉徳でないものはない。(K2) 〔陰陽家で説く八將軍の一つで、木星をつかさどり、悪い方角を示す〕太歳を犯したとしても、〔土星を司り、乗船、転居などを忌むとされる〕歳破に執したとしても害を被ることはない。

(L1) 天地は広大であり〔それは〕勝れた業の結果であり、(L2) 八方は広々としており、〔それは〕みな殊福が致るところである。
ゆえに天地八陽神呪経というのである。

以上の内容を概観しながら本文との対応を探る。まず最初の(A1)日月星宿と(A2)八部神将は、この文章の根本原理を示す。続いてそれぞれの性質を(B1)明明、(B2)厳厳という言葉で表し、それらが邪悪なものを対治すると述べる。この中、日月は概要17、18に出るもので、前に述べた自然の摂理に該当する。それに対して八部神将は、これを八部衆と考えれば概要27の最後に出るが、ここで説かれるような活躍はしていない。またそれが(A2)では五行、六甲を示すとあるが、これは本経では退けた占術と思われ、内容と合致しないように思う。これについて筆者は、この八部神将とは仏教的に見せた神将信仰ではないかと考える。神将とは道教に由来し、五方神将と呼ばれ、東西南北中央の五方を守護する。このように考えると、(B2)に出る「五方」とも通ずると思われる。

(C1)(C2)では、仏に質問する菩薩である無礙菩薩と無辺身菩薩が出る。これは經典と同じである。(D1)、(D2)では、それぞれ敬信の人、受持する人に対する功德が説かれる。

(E1)(E2)でも功德が説かれる。(E1)の「官吏から捉われ」は概要8、「父母の三途の苦」は概要10に説かれる。(E2)の「殯葬の日時」と「産生が易速」は概要18に説かれる。(F1)(F2)でも功德が説かれる。(F1)の結婚に関することは概要22、(F2)の墓の造成については概要18で触れられる。

(G1)(G2)は本経を守護する存在について述べる。(G1)では天地の諸聖、(G2)では護家神王である。この護家神王は本文では見ない。(H1)(H2)はその具体例である。(H1)には八大菩薩が出るが、これは概要12と23に出る。(H2)の見執の邪神とは何を指すか不明である。

(I1)(I2)は功德のまとめである。(I1)では土地という空間的な面

をいい、(I2)では読誦すれば凶日、禍時はないという時間的な面をいう。(J1)(J2)は土地と家屋についての功德であり概要の6が該当する。(K1)(K2)も功德である。(L1)(L2)は全体のまとめである。(L1)では天地の広大さ、(L2)では八方の広大さを説く。

以上、序文の内容を本文と対照させた結果、その内容は、おおむね本文の中で説かれるものに基づいていた。ただ、(A2)八部神将、(G2)護家神王、(H2)見執邪神については本文の内容とは関係なさそうである。ここで前の普賢寺本の跋文を思い起こすと、そこには本経を「神鬼を使い人世を安寧ならしめる」經典であると説いていた。そこでこれらは本経の読誦によって働くキャラクターをイメージして付加したのではないかと考えられる。また本経の仏教教学に関する部分は除かれていることも見逃せない。

よって、この序文は、呪術經典としての本経の内容に独自のキャラクターを加味して作り上げたものであることといえる。

4-2 「八陽經密伝」

続いて1791年刊行の松広寺本にだけ見られる「八陽經密伝」を取り上げる。内容を現代語訳して示し、原文は注記した²²。なお理解の便宜をはかるため、分科のための記号を付けた。

天地八陽經密伝

(A) 新羅国の三朝法師が唐国に入り、西天国、大聖国の義浄三蔵の教文を伝えた。

(B1) 大聖国の大富長者は二十歳の時にこの法を附け、『八陽經』と『般若心經』とをそれぞれ三万巻読み、四百年を過ごし、命が終った後には兜利天に生れた。生前には富一万三千石を持っていた。

(B2) 唐国の塩和尚はこの法を附け、『八陽經』を十万巻読み、仏の真身に見えて八位を得た。

(B3) 唐国の則貝相公は述べた。「私は生前、この法を附け、『八陽経』を三十万巻読むと、神通力を得て天上を往来し、大蔵経に無礙であった。衆神は倍す私を奉り、明らかに三世を知った」と。

(B4) 西天国の真表王は、二十八歳で宝位に居り、この法を附け、『八陽経』百万巻を読むと、宝位に三百年いた。終身の後には大梵天王として生れた。

(B5) 唐の登州の金顔の娘は十八歳でこの法を附け、『八陽経』、『般若心経』を三年のうちにそれぞれ一万巻読んだ。世に在ること一百二年で、穀食を四十万石たくわえた。

(C) 義浄三蔵和尚は文殊菩薩の化名である。

まず (A) では本経の朝鮮半島への伝来を記す。入唐した本経を伝えた僧侶を新羅国の三朝法師とするが、これが誰を指すのかはわからない。通常、三朝法師といえは三人の皇帝に仕えた僧侶を指すが、ここでは誰かはわからない。そして西天国、大聖国の義浄三蔵の教文を伝えたとあるが、これでは義浄が西天国、大聖国の出身ということになろう。

続いて (B) では、大聖国の大富長者、唐国の塩和尚、唐国の則貝相公、西天国の真表王、唐の登州の金顔の娘という五名の靈験が伝えられる。内容はいずれも本経を読誦したことにより利益を得たという内容である。この五名の身分は、それぞれ (B1) 居士、(B2) 僧侶、(B3) 貴族? (公とあることから)、(B4) 王、(B5) 女性であり、多様な人々に本経の利益があることを説いている。ちなみに (B5) 唐の登州の金顔の娘という設定は新羅を意識したものであろう。新羅時代、山東半島の登州には新羅人の町があり、赤山法花院では新羅式で儀礼が行われていたことは円仁の『入唐求法巡礼行記』に記されている。さらに娘の姓が金ということから彼女が新羅人であることが推測される。

そして彼らが得る利益としては、長寿、死後のすばらしいところへの転生、現世での富、のほか、僧侶ならば仏に見えること、王ならば在位の長

いことなどが説かれる。

この靈驗譚がどのような経緯で、誰が製作したのかはわからない。ただ、本経の受容が盛んになる中で本経の呪力を強調したいと考えた僧侶が製作したものと考えられる。これは前の序文と並び、朝鮮において本経の聖典化が促進された例と考えられる。

また、この密伝は前述したように1791年刊行の松広寺本にだけ見られるものであるが、民間宗教者である巫覡が用いる経文にも付いている。1932年に村山智順が朝鮮総督府の依頼で巫覡を調査した報告書『朝鮮の巫覡』には、村山が収拾した巫覡の経文が収録されている。その中に八陽経があり、順序は序、本文、密伝の順となっている²³。

5 結語

以上、本稿では、近代以前の朝鮮における本経および本経を含む偽疑経典群の刊本を年代別に18種に整理し、テキストの変遷をもとに本経の流通と特徴を考察した。結果を整理すると次のようになる。

1. 17世紀までは、おおむね「仏説広本太歳経」を表題とする偽疑経典群の一つとして刊行されていたが、18世紀以後は「八陽経」を表題とした刊本が刊行される傾向があった。これは「八陽経」が重視されるようになったことが反映したと考えられる。そして19世紀前後に最も活発に刊行された。
2. 時期による書式形態の変化を分類してその変化を探ると、①漢字だけ→②漢字にハングルを小さく併記→③漢字とハングルとを同じ大きさで併記であり、ハングルの存在が大きくなる。これは読誦経典としての意味が強まることであると考えた。
3. 1549年神興寺本から1791年松広寺本までは序文が付いている。その内容は、本経の呪術経典としての性格を強調するものである。

本經に説かれていた仏教思想の部分は反映されていない。

4. 1789年の松広寺本にだけ付される「八陽經密伝」は、様々な階層の五人の人物を登場させ、彼ら彼女らが本經の読誦により、長寿、来世での良い所への転生、現世での富などを得たことが説かれていた。この密伝が付されたのは、八陽經の刊行が盛んだった時期と重なる。

最後に、本經の流行と時代との関わりを想像してみたい。朝鮮時代第23代純宗15年（1815）1月、領議政（現在では國務総理に該当）の金載瓚が王に上申した²⁴。そこには「最近、聞くところによると、巫女と比丘尼の輩が密かに出没してはばかりことがない。そして〔人々を〕幻惑しそれが徐々にソウルの城中に増えている。祈祷などがほとんどの寺で行われている。」²⁵と、ソウルでの祈祷や儀式が盛んに行なわれている現状を指弾する。当時、朝鮮王朝では僧侶のソウルへの立ち入りを禁止していたが、それにもかかわらず僧侶や巫女が入っていたのである。これは僧侶や巫女の問題もあるだろうが、当時の人々がそうした祈祷や儀式を求めたこともあるであろう。この現状に対して金載瓚は「彼ら（巫女や僧侶）を徹底して搜索してソウルの城外に追い出し、近づけないようにせよ。もし、禁を冒したり藏匿するような者がいたら迅速に刑に処す」と要請している。

巫女や僧侶が祈祷や儀礼を行う際に用いられた經典の中には、本經も含まれていたと考えられる。この時期は本經が松広寺や仏巖寺で活版に刊行された18世紀末から15年後である。さらに仏巖寺は、ソウルから10キロほどしか離れていない。想像をたくましくすれば、仏巖寺本を持ってソウルに入り、人々の願いに応えた僧侶や巫女もいたかもしれない。

<参考文献>＊配列は漢字の日本語五十音順

1 一次文献

義浄訳『天地八陽神呪經』（大正蔵85、No2897）ほか、諸刊本

2 二次文献

2-1 単行本

小田寿典 [2010] 『仏説天地八陽神呪經一卷 トルコ語訳の研究』 (法蔵館)

増尾伸一郎 [2017] 『道教と中国撰述仏典』 (汲古書院)

村山智順 [1932] 『朝鮮の巫覡』 (朝鮮総督府)

2-2 雑誌論文

江田俊雄 [1956] 「仏書刊行より見た李朝代仏教」 (『印度学仏教学研究』 7)

小田寿典 [1986] 「偽經本「天地八陽神呪經」の伝播とテキスト」 (『豊橋短期大学研究紀要』 3)

— [2015] 「偽經本「八陽經」写本からみた仏教文化史の展望」 (『内陸アジア史研究』 30)

柏谷直樹 [1995] 「高山寺法鼓臺旧蔵『仏説天地八陽神呪經』の和訓」 (築島裕博士古稀記念会『国語学論集 築島裕博士古稀記念』)

韓普光 [1996] 「韓半島で作られた疑偽經について」 (『印度学仏教学研究』 45-1)

木村清孝 [1997] 「偽經『八陽經』の成立と変容」 (東方学会『東方学会創立五十周年記念東方学論集』)

金ナムギョン [2012] 「『仏説広本太歳經』の書誌と漢字音について」 (『民族文化論叢』 51) *韓国語

権奇悰 [1977] 「敬華の天地八陽神呪經註釈考」 (『韓国仏教学』 3) *韓国語

玄幸子 [2008] 「宋代社会における『仏説天地八陽神呪經』の受容について—P.3579から見えるもの」 (『敦煌写本研究年報』 2)

宋日基 [2004] 「順天松広寺刊行仏書考」 (『書誌学研究』 10) *韓国語

宋日基、金ユリ [2012] 「『六經合部』の板本研究」 (『書誌学研究』 52) *韓国語

高橋亨 [1931] 「朝鮮墳墓の齋宮と天地八陽經」 (『宗教研究』 新8-1)

張涌泉、羅慕君 [2014] 「敦煌本《八陽經》殘卷綴合研究」 (『中华文史论丛』 2014年02期) *中国語

西岡祖秀 [1981] 「チベット訳『仏説天地八陽神呪經』の敦煌写本」 (『印度学仏教学研究』 30-1)

南東信 [1993] 「羅末麗初華嚴宗団の対応と『華嚴』神衆經の成立」 (『外大史学』 5) *韓国語

— [1998] 「新羅中代仏教の成立に関する研究：『金剛三昧經』と『金剛三昧

経論』の分析を中心に」(『韓国文化』21) *韓国語

— [2001]「朝鮮後期仏教界の動向と『像法滅義経』の成立」(『韓国史研究』113) *韓国語

— [2005]「麗末鮮初の偽経研究—『現行西方経』の分析を中心として」(『韓国思想史学』24) *韓国語

羽田亨 [1915] : 「回鶻文の天地八陽神呪経」(『東洋学報』5-3) → のち『羽田博士史学論文集 言語・宗教編』(東洋史研究会、1958) に収録。

増尾伸一郎 [1994] 「日本古代における『天地八陽神呪経』の受容」(道教文化研究会編『道教文化への展望』、平河出版社)

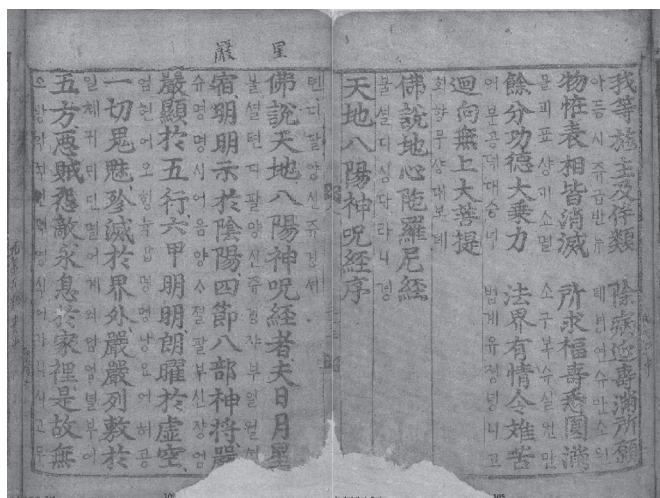
— [1997]「朝鮮本『天地八陽神呪経』とその流伝」(『東京成徳大学研究紀要』4)

— [1998]「朝鮮における道仏二教と巫俗の交渉」(『東京成徳大学研究紀要』5)

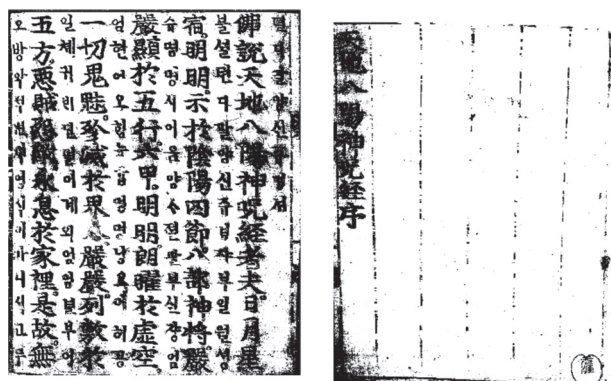
山中行雄 [2009] 「高麗の偽経『現行西方経』について」(『仏教大学総合研究所紀要』16)

ユ・クンジャ [2015] 「新興寺経板の造成背景と思想一大顛和尚注心経・諸真言集・仏説広本大歳経・僧家日用食時默言作法・大円集などを中心として」(『講座美術史』45) *韓国語

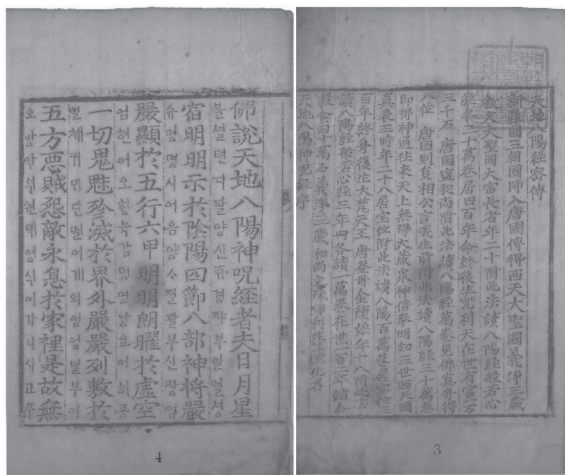
李サンベク [2016] 「姜在喜の仏書刊行に対する考察」(『仏教学報』77) *韓国語



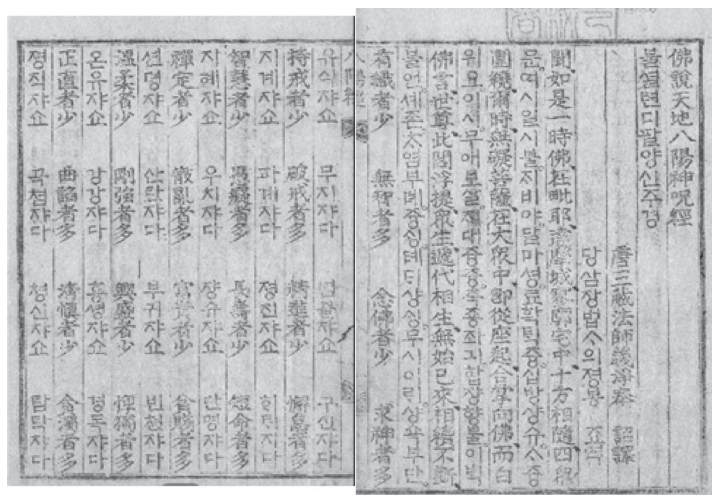
〈圖 1〉 龍藏寺本 (1635年)〔国立中央図書館所蔵〕



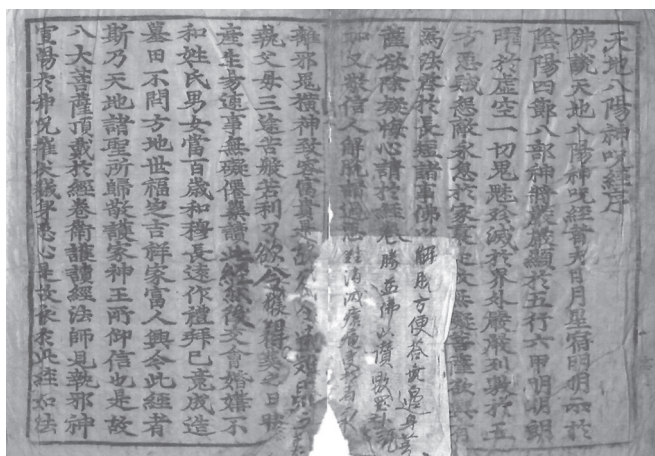
〈圖 2〉 普賢寺本 (1731年)〔国立中央図書館所蔵〕



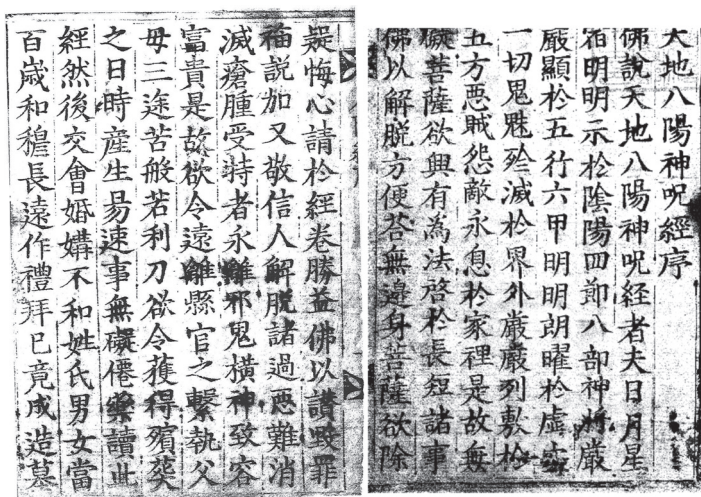
〈圖3〉松広寺本（1791年）〔国立中央図書館所蔵〕



〈圖4〉仏巖寺本（1795年）〔国立中央図書館所蔵〕



〈図5〉神興寺本（1549年）〔東国大学校図書館所蔵〕



〈図6〉鳳停寺本（1769年）〔国立中央図書館所蔵〕

【注】

- 1 この方面の研究状況を紹介すると、朝鮮の仏教の代表的な偽経である『金

- 剛三昧經』、『現行西方經』、『念仏因由經』、『千手經』を扱った研究には韓普光 [1996] がある。この中、高麗時代の『現行西方經』については南東信 [2005]、山中行雄 [2009] が研究を進めている。朝鮮時代の『神衆經』の研究には南東信 [1993] が、『像法滅義經』の研究には南東信 [2001] がある。
- 2 原語は「소경 팔양경 외듯」(出典はNaver国語辞書)
 - 3 『法宝新聞』2004年8月10日電子版によれば、在家信者が読誦、あるいは勉強している經典のベスト10は次の通りである。1 千手經、2 金剛經、3 般若心經、4 法華經、5 地藏經、6 華嚴經、7 天地八陽經、8 觀音經、9 阿彌陀經、10その他の經典。
 - 4 小田は1966年に「ウイグル文トルコ語天地八陽神呪經について」を発表している。小田寿典 [2010] 研究篇、p.383
 - 5 木村清孝 [1997] p.474
 - 6 同前p.482
 - 7 同前p.484
 - 8 同前pp.480-481
 - 9 五根と如来を対応させる説は、現在、定源氏が北宗禪との関係を探っている『金沙論』という文献にも登場する。偶然の一致かもしれないが注意を払っておきたい。
 - 10 小田寿典 [2010] 研究篇「第四節 仏教語とトルコ語の註」 pp.214-230
 - 11 日本では『仏説地神陀羅尼經』と、「心」字が「神」字になる。この經典については盲僧に関連して多くの研究がなされているが、近年のものとしては、星野和幸「盲僧の所持經典—『地神經』をめぐる—」(『駒沢大学仏教文学』18号、2015年)、石井公成「盲僧の読誦經典の源流—江田文庫本『仏説地心陀羅尼經』訳注—(上)」(『駒沢大学仏教文学』18号、2015年)がある。この中、石井が依拠した江田文庫本は、本論文の中の1657年開版の天冠山本『仏説広本太歳經』に収録されるテキストである。
 - 12 書誌情報に「八陽、七星請儀文ほか」とあり、全部でいくつあるのかはわからない。
 - 13 増尾伸一郎 [2017]「第17章 朝鮮本『天地八陽神呪經』とその流伝」 pp.612
 - 14 宋日基、金ユリ [2012] を参照。
 - 15 ちなみに仏巖寺では1796年に『仏説大報父母恩重經』、『仏説長寿滅罪護諸童子陀羅尼經』、『仏説寿生經抄』を合綴して『三經合部』と呼んでいる。

また『八陽經』と『仏説広本大藏經』を合綴して『八陽合部』と呼ぶ本（刊行年未詳、国立中央図書館所蔵）もある。また、『金剛經』などが収録される『六經合部』のうち『金剛經』、『華嚴經普賢行願品』、『阿弥陀經』の三つの經典だけを合綴して『三經合部』と呼ぶ例もある。（黄海道：慈悲嶺寺、1459年）

- 16 1760年から1910年までの国政運営の内容を、李氏朝鮮の国王（1897年以降は大韓帝国の皇帝）の日記の形式を採用してまとめた文書。
- 17 原文は「読古人書、若書自我自、則諺所謂八陽經矣、何益之有。」解釈は韓国古典総合DBの翻訳を参考にした。
- 18 姜在喜（1860-?）については李サンベク [2016] の研究がある。それによれば彼は朝鮮時代末期から大韓帝国時代に活動した官僚である。大韓帝国時代に皇帝の命を受け、父親とともに仏画、仏像の制作と仏書刊行を行った。彼が刊行した仏書は19種あり、本經もその一つである。彼は仏画制作に関連して仏巖寺と関連があり、そこから仏巖寺に所蔵されていた本經の版木をもとに刊行を行ったという。刊行に際して彼は1795年版の制作を主管した智瑩が作った仏教歌詞である「参禅曲」と「勤禅曲」を合わせて刊行した。
- 19 宝林寺全羅南道有形文化財第203号「宝林寺四天王像腹藏 經典仏書」に収録される。
- 20 仏巖寺刊記「八陽經、恩重經、高王經、竈王經、歡喜竈王經、明堂神經、此六種、原有刊板、而歲久剝故、重為鋟梓也。」
- 21 「仏説天地八陽神呪經者、（A1）夫日月星宿、明明示於四節、（A2）八部神將、嚴嚴踞於五行六甲。（B1）明明、朗曜於虛空、一切鬼魅、殄滅於界外、（B2）嚴嚴、列敷於五方、惡賊怨敵、求息於家裡。（C1）是故無礙菩薩、欲興有為法、啓於長短諸事、仏以解脫方便答、（C2）無辺身菩薩、欲除疑悔心、請於經卷勝益、仏以讚毀罪福説。（D1）加又、敬信人、解脫諸惡過難、消滅療腫、（D2）受持者、永離邪鬼橫神、致容富貴。（E1）是故、欲令遠離懸官之繫執、父母三途苦、般若利刀、（E2）欲令獲得殯葬之日時、産生易速事、無礙仙藥。（F1）読此經、然後、交会婚媾、不和姓氏、男女当百歳、和穆長遠、（F2）作礼拜、己竟、成造墓田、不問方地、世福定吉祥、家富人興。（G1）今此經者、斯乃天地諸聖、所帰敬、（G2）護家神王、所仰信也。（H1）是故、八大菩薩頂戴於經卷、衛護読經法師、（H2）見執邪神、宣暢於神呪、摧伏穢身惡心。（I1）是故依於此經、如法之後、無有惡方害地、（I2）周於三卷、七徧之次、永無凶日禍時。（J1）然後、動土築垣、而邪神不住、（J2）

捨古建新、而惡鬼不至。(K1) 退於禍害、進於絕命、無不吉德。(K2) 犯於大歲、執於歲破、不能損害。(L1) 天地蕩蕩、並勝業所感、(L2) 八方曠曠、皆殊福所致。日仏説天地八陽神呪經。」

- 22 「天地八陽經密伝」「天地八陽經密伝、(A) 新羅国三朝法師、入唐国、伝得西天国大聖国義浄三藏教文。(B1) 大聖国大富長者、年二十、附此法、読八陽經、般若心經各三万巻、居四百年、命終後、生兜利天、在世、有富一万三千石。(B2) 唐国塩和尚、附此法、読八陽十万巻、見仏真身、得八位。(B3) 唐国則貝相公言、我生前、附此法、読八陽經三十万巻、即得神通、往来天上、無礙大藏、衆神信奉、明知三世。(B4) 西天国真表王、時年二十八、居宝位、附此法読八陽經百万巻、居宝位三百年、終身後、生大梵天王。(B5) 唐登州金顔娘、年十八、附此法、読八陽經、般若心經、三年内、各読一万巻、在世一百二年、儲合穀食四十万石。(C) 義浄三藏和尚、文殊菩薩化名。」テキストは松広寺刊本である。
- 23 村山智順 [1932] 「祈祷經文集」 pp.31-32.
- 24 これは権奇棕 [1977:288] にヒントを得た。権は、敬華が本經の註釈を行った背景として、この上申に説かれていることがあったのではないかと推測している。
- 25 『純祖実録』18巻、純祖15年1月15日「啓言：斥左道定民志、即治教之先務、我朝之家法也。泮儒毆逐巫女於泮宮、世宗至下〔予〕疾欲愈之教、松都儒士毀松嶽淫祠、明廟優批巫嘉之、逮我先朝、禁巫覡僧尼、無得出入城内、仍為法府禁令。近聞、巫女比丘尼輩、藏蹤出沒、略無顧忌。幻惑漸滋於城〔闔〕、祈賽殆遍於寺刹、聽聞所及、騷訛輒広云、此豈列聖朝斥左道定民志之盛德至教哉。令京兆秋曹、謹遵先朝受教、窮加搜索、竝即逐送于城外、俾無〔敢〕接跡於近京之地。如有冒禁藏匿之類、請亟施刑配之典、從之。」(国史編纂委員会・朝鮮王朝実録データベース)

The Circulation and Characteristics of the Apocryphal Sutra *Tian di ba yang shen zhou jing* on the Korean Peninsula

SATŌ Atsushi

Tian di ba yang shen zhou jing is an apocryphal sutra created in China around the eighth century that was transmitted over a wide area spanning from East Asia to Central Asia. Still today it is recited on the Korean Peninsula. This paper compared eighteen printings of this sutra from the Joseon era and investigated their circulation and characteristics. I reached the following four conclusions.

1. Until the seventeenth century it was printed as part of the group of apocryphal scriptures entitled *Fo shuo guang ben tai sui jing*. From the eighteenth century onwards, it tended to be printed under the title *Ba yang jing*. This appears to reflect that the *Ba yang jing* had come to be seen as important. Around the nineteenth century it was printed the most.

2. Over time the sutra's format changed as follows: from (1) only Chinese characters to (2) Chinese characters with small Hangul added, and then (3) Chinese characters and Hangul written in the same size. Hangul came to receive more emphasis. I believe that this was because it came to be seen more as a sutra to be recited.

3. From the 1549 Sinheungsa version to the 1791 Songgwangsa version an introduction is attached. It emphasizes that it is a magical sutra.

4. The "Esoteric Transmission of the Ba yang jing," which is only attached to the 1489 Songgwangsa version, introduces five people from a variety of classes, and states that by reciting the sutra they acquired the likes of longevity, a favorable rebirth for the next life, richness in this life, and so on.

This secret transmission was added during the time that the printing of the *Ba yang jing* flourished.

佐藤厚氏の発表論文に対するコメント

崔 鉉植*著・佐藤 厚**訳

1.

今回、佐藤厚先生の発表の討論を引き受けることになりましたが、実際のところ『仏説天地八陽神呪經』（『八陽經』）に対して関心をもって読んだのは今回が初めてでした。もちろん朝鮮時代に本書が多数刊行されていたことは知っていましたが、民間信仰と連結した儀式関連文献であり韓国仏教史では特別の意味はない文献という先入見を持っていました。ところで、このような先入見は、私だけでなく韓国の大部分の学者たちも同様です。韓国の学界における本書に対する先行研究は、一部の書誌的な研究を除けば皆無の状態でした。実際、韓国の学会や寺院の集まりで本書に対して聞いた記憶はありません。よって佐藤先生の発表文で『八陽經』が現在の韓国の仏教界で広く読まれている代表的經典であるという文章を見てとても驚きました。本書が韓国でかくも重視されていることを初めて知りました。

おそらく、このような現実と認識の不一致は、現在韓国仏教の主流である曹溪宗が、20世紀に入り、既存の仏教界の迷信的要素を排除し、禪宗のアイデンティティを強化する（仏教）浄化プロジェクトを持続的に推進してきたことと関連があると思われます。近代以前に仏教界で広く活用され、現在も曹溪宗の外の多数の仏教人たちに広く読まれているにもかかわらず、曹溪宗や仏教学界など、韓国仏教の公式的な分野では『八陽經』や、

*최연식 (チェ・ヨンシク)。東国大学校文学部教授。

**專修大学ネットワーク情報学部特任教授。

これと類似した性格の文献が排除されてきたのです。しかし佐藤先生の発表を通してわかるように、本書は朝鮮時代に大変活発に刊行されただけでなく、朝鮮時代の仏教の性格を理解するのにきわめて重要な文献であるといえます。佐藤先生の発表に対する論評を引き受けることにより、既存の偏狭な先入見から脱することができたことをありがたく思います。佐藤先生と、および論評の機会をくださった人民大学の先生方に感謝いたします。

2.

近代の韓国仏教界で『八陽經』が排除されていたのは本書が迷信的性格を持っていると考えられたためです。ところが発表文を通してわかるように、本書には一世俗の合理主義的な立場では迷信とみられる一經典を読誦すれば世間の苦難から脱することができるという内容がありますが、その程度は多く的大乗經典に見えるものであり、仏教の立場から見て、特別に迷信的であると見るのは難しいと思われます。むしろ主な立場は仏教徒たちが非仏教的な鬼神・占卜などの信仰に陥るのを警戒し、批判して仏教信仰に忠実なことを強調しています。それにもかかわらず本書が迷信として排除されたのは、世俗における幸福を追求する内容とも関連があるでしょうが、それよりは本書を主に活用していた人と活用される状況のためと考えられます。すなわち発表文で言及しているように、朝鮮時代には占卜師として活動していた盲僧たちが『八陽經』を唱える存在として語られており、本書が個別の經典として単行で刊行される場合はまれで、大部分が民間信仰あるいは道教信仰と関連する他の書物と合刊されていますが、これは本書が鬼神および占卜信仰の主宰者たちにより、そのような儀礼の一部として読誦されたことを示すものであるといえます。もちろん本書が寺院で僧侶たちの主導で刊行され、寺院の仏教儀礼でも活用されたと思われるが、本書が寺院の外の民間で広く活用される中で純粋な仏教信仰とは距

離がある不純な書物として見なされたもののようです。このように『八陽經』は、内容自体は仏教的でしたが、現実では本書で批判する鬼神・占ト信仰と連結されて活用されたという点で、本書は本の中の内容と本の外の機能が互いに矛盾していたといえます。そうならば、「盲僧が『八陽經』を唱えるように」という諺は、本来は「意味もわからないままぶつぶついう」という意味ではなく、このような内と外の矛盾—『八陽經』で排斥の対象となった私師としての盲僧が『八陽經』を活用している状況—に対する諷刺から出現したものではないかと考えられます。『日省録』（1762年4月25日）の「若書自我自、則諺所謂八陽經矣」という文も同様に、「本の内容と関係なく、あるいは本の内容と反対に言う」という意味と解釈されます。

非仏教的信仰を批判する『八陽經』が、非仏教的信仰で積極的に活用される状況は、朝鮮時代の仏教と民間信仰の関係をよく示すものであるといえます。政府の抑仏政策により民間の後援に依るようになる中、仏教信仰と儀礼に民間信仰の姿が受容されると同時に、民間信仰と儀礼に仏教的要素が活用されながら、両者の区別があいまいになる状況を、『八陽經』が象徴的に示しており、まさにそのような理由のために近代の浄化の過程で新たな仏教の主流から排除されてしまったのです。近代の韓国仏教が、仏教浄化のために祈福仏教の排斥を掲げましたが、『八陽經』はまさに祈福仏教の象徴として見ることもできましょう。

このような点で、他の国とは異なり朝鮮時代の『八陽經』にだけ序文が付いているのは、本書が民間信仰と区別される仏教の經典であることをあらわすための朝鮮時代の仏教者たちの表現ではないかと思われます。民間信仰と関連した本と見なされている『八陽經』が仏教信仰のためのものであることを強調するために、その基本的な立場を整理して提示したものと見られます。18世紀末の仏巖寺本には序文が付いて居ませんが、これは仏教界の民間信仰化がより深まった状況を示すのではないかと思います。当時、仏巖寺では多くの文献が刊行されましたが、大部分、民間信仰と関連

した文献でした¹。それ以前の時期にも寺院の外の民間の儀礼では、序文がないテキストが使用されていたのではないかと考えられます。ちなみに序文B2の「求息於家裡」の求は永の誤読です。

3.

朝鮮時代の祈福仏教の象徴といえる『八陽經』が、いつ韓国に伝来したのかはわかりません。増尾伸一郎は、高麗時代にすでに相当流布していたと述べましたが、発表文で述べられているように、それは正しい根拠を持っていません。現在、1549年刊本が最も古いだけでなく、それ以前の時期の本書に関する記録は見られません。当時の多くの像内納入品にも本書は見えていません。ただ、現在まで中国の漢文本の中に朝鮮本と一致するテキストがないことから見て、極めて早い時期に伝わった可能性が高いのではないかと思います。発表文で紹介しているように、小田寿典はトルファン出土のテキストとの類似性を根拠として遼代（11-12世紀）のテキストが伝来した可能性を述べていますが、実際、その時期に受容された可能性も高いのではないかと考えられます。ただ16世紀までは仏教界でそれほど重視されませんでした。15世紀以後、抑仏政策が実行される中で、一般大衆との交流を容易にできる文献として新たに注目されるようになったのではないかと思います。この時期には多数の寺刹が撤廃され僧侶たちが還俗する中、民間では庶民を相手にして念仏と簡単な經典読誦により仏教信仰を主導していた半僧半俗の社長・居士たちが台頭していました²。『八陽經』のような經典は、それらを通して民間に流布され、これを土台として仏教界内部へ本格的に入るようになり、その過程で元来はなかった序文が追加された可能性があると考えられます。韓国における『八陽經』の受容過程に対する先生の意見をお聞かせいただきたいと思います。

4.

発表文では『八陽経』の諸刊本を、形態によりAからDに区分し、その展開の様相を、「A（漢文）→B（小字ハングル 併記）→D（大字ハングル併記）」として述べています。概略的な流れは同意しますが、Cの位置に対する説明は不十分な感じを覚えます。発表文では刊行年代に依拠して鳳停寺本（1769年）をC類型に分類しましたが、実際、板本の形態から見て、B類型はC類型を土台とし、そこにハングルを附加したのではないかと考えられます。そうならば、実際のところC類型は17世紀初に成立していた可能性が高いと思われます。一方、私が確認したところによれば、熊神寺本（1807年）と磧川寺本（1861年）もハングルがない漢文本で、AおよびC類型と同じ性格です。そのほかにも18世紀に漢文本として刊行された多くの版本が確認されています。すなわち、漢文本は16世紀中葉から19世紀中葉まで多様な形態で継続して刊行され、その中間にこのような漢文本を土台としてハングルが並記されたBとD類型が刊行されたのです。B類型は刊行場所は多様ですが同じ形態であり、Dは同じ寺院で同じ形態で刊行されました。

一方、発表文では鳳停寺本（1769年）を単刊としていますが、同年（1769年）に同じ寺で『仏説太歳経』が刊行されたことを〔増尾、1998、p.5〕考慮すると、本書は単刊ではなく『仏説太歳経』とセットで刊行された可能性が高いと思われます。

5.

発表文では『八陽経』の本文に対しても詳細に説明しているので本書の内容と思想的特徴について多くの理解を得ることができました。ところで本文解釈の中、(17)の「愚人依字信用、無不免其凶禍」は、内容上、「愚人は文字を信用して災難を受ける」ではなく、「愚人たち（＝一般人）が、

この文を信じ使用すれば、すべての災難を受けないようにする」と解釈しなければならないのではないかと思います。このように解釈すれば、この句は、文字に対する執着を批判するのではなく、經典の内容によく従うことを勧める文章と解釈しなければならないでしょう。一方、(31)の「欲作有為功、読経莫問師」も、「有為の功をなそうとすれば、經典を読み師匠に尋ねることなかれ」ではなく、「有為の功をなそうとすれば、(仏教の)經典を読み、(仏教以外の)邪師(=占卜師)に尋ねることなかれ」と解釈するのが自然と思われます。この文も經典の内容によく従うことを強調する文章と見ることができると考えられます。

本文(25)に対する説明では經典の『阿那含經』、『大智度論經』、『瑜伽論經』などをそれぞれ『阿含經』、『智度論』、『瑜伽論』などと表現しておられます。ところで『阿那含經』は經錄に『阿含經』とは別の經典として出ています。また阿頼耶識から出るという『大智度論經』と『瑜伽論經』も、『智度論』と『瑜伽論』ではなく、それらの根拠となるより深遠な經典を指した可能性も考えられます。一方、含藏識に『阿那含經』と『大般涅槃經』を連結させ、阿頼耶識に『大智度論經』と『瑜伽論經』を連結させるのは、それなりの思想的配対があるのではないかと考えられます。これに対する先生の意見をお伺いしたいと思います。

最後に本文(3)の内容を、人間至上主義の特異な仏教思想であると述べておられますが、本書でこのような人間至上主義を主張する背景や意図は何でしょうか。これに対する先生の意見がおりかどうか、お尋ねしたいと思います。

ありがとうございました。

【注】

- 1 白ヘギョン・宋日基「楊州地域 仏書刊行に関する研究」『韓国文献情報学会誌』40-4、2006年。18世紀末に仏庵寺では中国民間道教の善書も刊行さ

れたという（李テヒ「朝鮮後期 善書の受容と流行の要因」『国際語文』69、2016年）。

- 2 陳ナラ「朝鮮前期社長の性格と機能」『韓国思想史学』22、2004年。

崔鉉植氏のコメントに対する回答

佐藤 厚*

崔鉉植先生におかれましては拙論を丁寧に読んでくださり、筆者の誤りを指摘してくれたほか、有益なご指摘をしてくださいました。心より感謝申し上げます。ここに崔鉉植先生（以下、論評者）のご質問に対する応答を申し上げます。

論評者の質問は大きく分けて、朝鮮半島での流通の問題と、『八陽経』自体の問題からなります。

（１）朝鮮半島での流通の問題

第一に、朝鮮半島への『八陽経』の伝来時期に関する問題です。現存する最古の刊本は1549年ですが、それ以前のいつの時期に伝来したかということですが、正確なことはわかりません。高麗時代に伝来した可能性はあると思いますが、その際に流行した記録は現在のところ見いだせません。『八陽経』が流行しだすのは、論評者の指摘通り、朝鮮時代になり抑仏政策が盛んになってからの可能性が考えられます。この問題を考える時の一つのカギが、『太歳経』などの偽経群とセットになって流通していたことです。これも中国では見られない特徴ですが、だれがどのような形でセットにしていったのか、この辺りが謎を解くカギになると思います。またこの問題を考える時に、中国での刊行や流通の状況を探るのもヒントになると思います。

第二に、刊本の変遷に関して、漢文だけのタイプであるC類型を重視す

*専修大学ネットワーク情報学部特任教授。

べきではないかという指摘です。これは論評者の意見に同意します。筆者がC類型を細かく検討できなかった理由の一つに実際のテキストを見ることができなかったこともあります。熊津寺本は現在東京の東洋文庫にありますが、筆者が閲覧しに行った時には修理中とのことで実見することができませんでした。また鳳停寺本（1769年）が単刊か否かですが、ご指摘の通り同年に『太歳経』が刊行されているのでセットになった可能性があります。また、刊本を見ると、他の経典との連続は確認できません。

第三に、朝鮮本だけにある序文の語句の問題です。序文B2「求息於家裡」の求が永の誤読との指摘。これはそのまま受容いたします。

（2）『八陽経』 そのものに関する質問

続いて『八陽経』そのものに関する質問三つです。

第一に、「愚人依字信用、無不免其凶禍」の読みの問題です。私が「愚人は文字を信用するので災いを受ける」と解釈したのに対して、論評者は、「愚人たち（＝一般人）が、この文を信じ使用すれば、すべての災難を受けないようにする」と解釈します。漢文からみれば二重否定なので災難は受けないと解釈するのが正しいです。論評者は内容を、「文字に対する執着を批判するのではなく、経典の内容によく従うことを勧める文章と解釈しなければならないでしょう」と述べておられます。ただここで問題と思われるのは、この文脈は愚人が最終的にはよくない境地に行くことを説いていることです。文字の部分に続いて、邪師を使い、邪神を求めるなどマイナスなことが説かれます。そう考えると文字についても愚人にマイナスなことが説かれるべきではないかと考えるのです。ここで解説本を参考にすると、「愚人たちは、文字により、すべての災難を受けないとなると信じる」（張尚2000）という解釈があります。これも一つのアイデアだと思います。

第二に、八識説と経典論書の配当の問題です。論評者は「含藏識に『阿

那含經』と『大般涅槃經』を連結させ、阿頼耶識に『大智度論經』と『瑜伽論經』を連結させるのは、それなりの思想的配対があるのではないかと考えられます」と述べています。ここでの問題点は、まず一つは阿頼耶識を意味する含蔵識が第七識になっていることです。これがなぜかはわかりません。続いて配当される經典・論書の意味についてですが、何か意味があると思いますが、現在のところアイデアはありません。

第三に、『八陽經』の性格とされる人間中心主義に関する問題です。論評者は「本書でこのような人間至上主義を主張する背景や意図は何でしょうか」と質問しています。思想背景には、これが8世紀ころの著作であるとする、一つはアイデアにすぎませんが北宗禪との関連が考えられます。それは五根と如来や仏とを対応させることが北宗禪の文献にも見えるらしいからです。だからといって北宗禪そのものかどうかはより検討しなければなりません。あとは密教も関係するかもしれません。